

# 空爆の下で 難民たちは 泣いていた。

アフガン難民支援に現地へ赴いた  
国際医療NGOは何を見たのか。



## 谷合正明

たにい・まさひろ（AMDAプログラムオフィサー）  
一九七三年埼玉県生まれ。京都大学卒業  
後、スウェーデン・ウプサラ大学留学。  
京都大学農学部修士課程修了後、ODA  
開発コンサルタントを経て二〇〇〇年一  
月よりAMDA勤務。

## 巨大な都市スラムの ような難民キャンプ

十月十二日昼前、国際医療NGO  
（非政府組織）「AMDA」の緊急救援  
チームはパキスタン南部の港湾都市  
カラチに無事到着した。その日はイ  
スラムの休日にあたる金曜日で、午  
後のお祈りの時間のあと、カラチで  
初めての大規模なデモが予定されて  
おり、市内は閑散としていた。私た

ちはデモが始まる前に急いで宿舎に  
直行した。空爆以後、パキスタンで  
は、デモやストライキが頻発した。

デモの翌日会った商店主は、「テロ  
事件以来マーケットにくる客が少な  
くなった。今日は久しぶりに賑わっ  
ているよ」と語っていたが、次の瞬  
間にはアメリカの空爆批判を一気に  
まくし立てた。

もつとも、パキスタン人全員が反  
米デモに参加しているわけではな  
く、デモやストライキがある日以外  
は、カラチやクエッタは普段どおり  
の街で、日本で伝えられている情報  
は断片的なものだと感じた。

パキスタン到着後一週間は、安全  
確保のための待機状態や情報収集に  
費やされたが、十月二十日、日本人  
チーム五人とパキスタン人チーム一  
七人の多国籍医師団を結成し、二人  
のパキスタン人随行人とともに、カ

ラチ市内ソフラブ・ゴスキャンプで  
の診療活動を始めた。その日は、日  
中三五度にもなる蒸し暑い日だっ  
た。テロ事件以後に流入してきたア  
フガン難民はこのキャンプでは見ら  
れなかった。

ソフラブ・ゴスキャンプは、一九  
八二年ごろ、旧ソ連のアフガニスタ  
ン侵攻を受けてできたキャンプだ。  
キャンプの人口は、一万人から三万  
人規模と推定された。カラチ市内か  
ら北東に二〇キロほど離れたこの場所  
は、乾燥地帯に忽然と現れる巨大な  
都市スラムという感じであった。こ  
のキャンプは、現在、パキスタン政  
府によって保護管理されており、国  
際機関や国際NGOの支援は入って  
いない。

キャンプで活動するにあたって  
は、警察やカラチ市の難民担当官、  
また難民キャンプのリーダーにそれ

それ今回のAMDA医療活動の意義  
と目的を説明し、それが受け入れら  
れるまでに一週間ほどかかった。こ  
のキャンプが八〇年代にできたもの  
であり、大都市カラチにあることか  
ら、難民がある程度パキスタンの生  
活習慣に溶け込んでいるのではない  
かと予想していた。しかしキャンプ  
の中はアフガニスタンそのもので、  
ブルカ（黒いベール）を頭の上からか  
ぶっている女性も多かった。昨年ア  
フガンで診療活動をしていた女性医  
師も、生活習慣がまるつきり変わら  
ないこの難民たちに驚いていた。

## AMDAと アフガンの関わり

AMDAは、岡山に本部を持つ国  
際医療NGOである。

AMDAとアフガン難民との関わ  
りは、九六年より始まった。アフガ



ニスタン国内ではアズラとテイジン  
の、パキスタン国内ではペシヤワー  
ルのアフガン難民キャンプで医療支  
援を行った。また九九年にはタリバ  
ンと北部同盟の閣僚を岡山に招き、  
内戦中の医療和平をNGOの立場か  
ら訴えた。そして、このたびのアフ  
ガニスタンへの報復攻撃を受けてア  
フガン難民医療支援のために、五人  
からなる医療団をパキスタンのカラ  
チとクエッタに派遣した。私はその  
主任調整員として、十月十二日から  
十月二十四日までパキスタンに滞在  
したのである。

調整員の私も含め医師や看護婦が  
直面した問題はまず言葉であった。  
パキスタンに流れてくるアフガン難  
民のほとんどはパシウトウン民族  
で、カラチで主に使われるウルドゥ  
語を理解しない。日本人はもちろん  
パキスタン人医師にもパシウトウン

語を理解しない医師が多く、難民と  
コミュニケーションをとる大変さを  
痛感した。

その日は、午前十一時すぎから十  
五時まで診療を続けた。私たちは約  
二五〇人の患者を診察した。患者の  
六割は十歳以下の子どもで、それに  
ついて、年若い男女が多かった。  
診察が開始されると、それまで待ち  
わびていたかのように、キャンプか  
ら赤ちゃん連れの母親が多くやって  
きた。外来受付や薬受け渡し場所に  
は人があふれ騒然とした。

患者の症状は蚊やダニなどの虫さ  
されによる皮膚疾患、呼吸器系疾  
患、栄養不足による貧血、マラリ  
ア、結核が多く見られた。処置とし  
ては、外科的皮膚処置、内服薬投与  
(抗生剤、ビタミン剤、鉄剤、筋肉注  
射)で対応した。

薬を渡すとき医療スタッフが足り

を何やら連呼するので、通訳に尋ね  
ると、子どもたちはどちらの大統領  
にも批判を言っていた。  
今回のパキスタンにおけるアフガ  
ン難民医療支援では、他のアフリカ  
やコソボでの経験とは比較にならな



小児に注射をするAMDAの看護婦

ず、現地のカメラマン、ガードマン  
も動員して、患者に薬を手渡した。  
カラチのこの難民キャンプには、重  
度の栄養失調児は見られなかった  
が、本当の重病人は、われわれの診  
療所にも来れずにいたのかもしれない。

難民キャンプでの医療活動の経験  
がある女性医師は、患部を見るとい  
うより相手の心を診ると言ったほう  
が正しいくらい、一瞬にして患者の  
信頼を得ていた。医師がそつと肩に  
手を置ただけで、泣いて感謝する老  
人の姿を何度か目の当たりにし、医  
療とはこういうものだと思感した。

一方で、処方した薬に信用がおけな  
いのか、それを拒む難民もいた。  
ブルカを頭からまとう女性の場  
合、顔色で判断することができない  
ので、服の上から聴診器をあてたり  
して問診をした。アフガン女性には

いほど、医療支援を始めるまでの難  
民との信頼構築が大事であることを  
痛感した。

アフガン難民に対して、「彼らに  
ルールを守ってもらうことはできな  
い」「食糧配給をしたら一歩間違え  
れば騒乱になる」「キャンプに学校  
や病院など作ってもすぐに壊され  
る」といったことをパキスタン人の  
ガードマンから聞くことがあった。  
が、一方的にアフガン難民を非難す  
ることはできない。

日本は、アフリカや旧ユーゴでの  
内戦など、政治的にほぼ中立な立場  
であったのとは違い、このたびは大  
きく様相を異にする。タリバン支配  
側で育ったアフガン人にとってみれ  
ば、日本は敵かもしれない。アフガ  
ン難民支援では、初めからNGOが  
「救世主役」として現地で受け入れ  
られるという幻想は捨てたほうがよ

## 難民との 信頼構築が大事

ブルカをまとうものとまとわぬもの  
両方いたが、前者は医師にも言葉を  
発することはあまりなかった。そん  
な中「こんなの暑いわ」とブルカを  
とって、手で風を送る茶目っ気のあ  
る女性もいたのは意外だった。

今回大いに反省したことは、アフ  
ガン難民の女性にカメラを向けたと  
いうことで、診療活動が終わったた  
方に、仮設診療所に向けて投石を始  
めようとする難民がいたことだ。撮  
影の許可は事前に難民のリーダーか  
らとっており、女性に直接カメラを  
向けることもなかったが、「ユダヤ  
教徒が、アフガン女性を撮影した」  
といううわさが広まり、彼らの怒り  
を買った形となった。また、ムシャ  
ラフ大統領とブッシュ大統領の名前